

憎しみのなかにある時こそ



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
 東京医大卒業後、大阪大第二内
 科入局。平成7年、尼崎市で「長
 尾クリニック」を開業。外来診療
 から在宅医療まで「人を診る、総
 合診療を目指す。医学博士。近著
 「平穏死・10の条件」「胃ろうと
 いう選択、しない選択」はいずれ
 もベストセラー。関西国際大学、
 東京医科大学客員教授。56歳。

「生と死シリーズ」で書いてきたところに、とても悲しいニュースが届きました。フリージャーナリストの後藤健二さんが過激組織「イスラム国」に殺害されたという報道。生還を祈っていたのに、本当に残念です。世界中が後藤さんの「生」と「死」に揺れた今週でした。後藤さんの軌跡を振り返ってみます。

死には、「予期された死」と「予期されなかった死」があります。後者は突然死で

後藤さんの遺志を共有しよう

「生と死」シリーズ⑦
 「生と死」シリーズ⑦
 「生と死」シリーズ⑦
 「生と死」シリーズ⑦

や認知症や老衰で亡くなる場合、「終末期」を経て死に至ります。実は、統計学的に突然死する人の割合は5%とわかっています。逆に言えば、95%の人は終末期を経て死に至ります。しかし、医学の発達や最期の医療の選択まで医者任せにした結果、終末期がわかりにくくなっています。その終末期の定義が困難という理由で、日本では終末期医療に関する自由な議論がこの10年間停滞したままです。

さて、後藤さんの最期ですが、私は予期されたもので、されなかったものでもなく、あえて言うなら「覚悟し



「生と死」シリーズ⑦

を捜しに行きました。こんな勇敢な日本人がいることを、私たちは誇りに思うと同時に、彼が残したメッセージをしっかりと読みしめなければ申し訳ないです。

昨年12月2日の後藤さんによるツイッター(Twitter)の投稿から。「そう、取材現場に涙は要らない。た

「戦地は怖いが神様がいる」。こうした後藤さんが残した魂の言葉に世界中が共鳴しています。



レインボープロジェクト 後藤さんはカラフルな絵を描いたことがないアフガニスタンの子供たちに「夢を描いてほしい」という思いから、クレヨンや色鉛筆を贈るプロジェクトに2009年まで取り組んだ。08年、子供たちが青空の下で描いた100枚以上の絵が日本に届いた。

た死」とも呼ぶべき極めてまだ、ありのままを克明に記録して私が知らなかった世界で、言葉が見つかりません。映像や活字で見る後藤さんはとても優しく、温和な人でした。貧困地帯で暮らす子供たちの教育を気にかけて、絵で支援(レインボープロジェクト)しました。紛争の悲惨さだけでなく、難民の生活や子供たちの笑顔を日本人ならではの視点で伝えました。そして危険を承知で湯川遥菜さん

だ、ありのままを克明に記録し、人の愚かさや醜さ、理不尽さ、悲哀、命の危機を伝えることが使命だ。でも、つらいものはつらい。胸が締め付けられる。声に出して、自分なりに言い聞かせないとやっとなれない(原文ママ)。

さらに私が感銘を受けた言葉を記します。「怒ったら、怒鳴ったら、終わり。それは祈りに近い。憎むは人の業にあらさず、裁きは神の領域」。上げます。

後藤さんの「死」はPPKでも、病死でも、自死でもありません。国境を超えて子供たちの未来に殉じた、「生」と一体となった「死」のように思えます。「自分のような町医者など、なんてちっぽけなものだ」と思いました。後藤さんのご冥福をお祈り申し上げます。